

「明・・・瓦」という呼称について

～『琉球陶器の来た道』を踏まえて～

石井 龍太

はじめに

本小稿が読者の方々の目に触れるころ、那覇市立壺屋焼物博物館と沖縄県立博物館・美術館が共催した企画展『琉球陶器の来た道』は盛況のうちに終了していることだろう。この展示では、琉球諸島の近世窯業史について、特にその開始と展開について、大胆な粗描が試みられた。多くの史資料がその手掛かりとして取り上げられた。中でも目玉となったのは、私にとっての最大のテーマである湧田古窯跡の未公開資料であった。

さて本展示が志向した琉球近世窯業史の解明は、研究者の地道な努力と議論によって今後さらに進められていくはずだが、それには長大な時間と莫大な労力が必要である。本展示に掲げられたキーワードの一つに「議論」がある。展示期間は終了した。展示にまつわるシンポジウムも開催された。これからは、「議論」を「継続」する努力が必要である。千里の道も一歩から。情熱を圧倒するほど骨の折れる作業を「継続」し、さらに後進に「継続」させなければならないだろう。

本小稿では、琉球諸島で近世期に生産・消費されていた瓦の用語について述べる。これまで一般に受け入れられてきた用語を整理し、問題提起を行うことで、「議論」を「継続」するための努力の一つとしたい。とはいえ新しい話題ではない。既に5年前から提唱していることなのだが、未だ議論不十分と認識されているようだ。用語の問題は専門的で、議論のための議論のようにとらえる向きもあるだろう。中にはどうしてもよい、統一さえされていけばよいととらえる向きすらある。しかし「何を何と呼ぶか」は対象を認識する第一歩である。また「何を何だととらえているか」という、研究者の認識を映し出すものでもある。おろそかにできるものではないと私は考えている。

これまでの経緯と問題点

私の主張を展開する前に、先ずこれまでの経緯について略述し、問題点を整理しておこう。

琉球諸島で近世期、概ね16～19世紀頃に作られ、消費されていた瓦は、同時代の中国明代(1368～1661年)の瓦の系譜を引くとされてきた。その理由は、

①中国明代の技術書『天工開物』（1634年）の記述と一致する。

②琉球の文献史料『琉球國由來記』『新参阮姓家譜』等に、16世紀頃、中国人陶工・渡嘉敷三良が那覇の真玉橋村で瓦を焼き始めたと記録される。

③湧田窯の瓦窯が中国北京の窯と類似する。

の3点に集約される。そしてこれらを根拠として、「明朝系瓦」等、明という中国の王朝名を冠する名称で呼ばれてきた。しかしこれらの主張には問題も多い。順に見ていくことにしよう。

①

先ず中国明代の技術書『天工開物』に記載される瓦製作技法は、「平瓦桶巻き作り」と呼ばれる技法で、アジア全域に広く、また古くから分布している。琉球諸島の近世期の瓦に同様の技法が用いられているのは間違いないが、単にこの技法を使っているからといって、その系譜となる瓦の地域や時代を特定するのは難しい。

またほとんど認識されていないようだが、そもそも『天工開物』に詳述されているのは素焼きの平瓦と施釉の瓦である。琉球諸島の瓦は、素焼きの丸瓦・平瓦を用いる本瓦葺きである（図1）。一方『天工開物』には素焼きの丸瓦が取り上げられておらず、平瓦のみで屋根を葺く「はんぶき匭葺」（図2）の瓦について述べたものであると考えられる。実際、『天工開物』にはそれらしい屋根の様子が描かれている（図3）。これはアジア各地に広く分布する葺き方である。また釉薬をかけた瓦・瑠璃瓦は、現在でも中国各地の伝統的な宮殿遺構等で出土している（図4）。

このように、『天工開物』に記載されている瓦は、琉球諸島の近世瓦と直接結びつくものではないのである。この書物を根拠として、「明」の名を冠する用語を用いるのはおかしい。では他に根拠があるのかといえば、中国で明代に生産・消費された瓦についてはほとんど分かっていないのが現状である。直接資料同士を突き合わせて検討することが出来ない以上、「明」かもしれないし違うかもしれない、どちらとも言えないのが現状なのである。

②

また『琉球國由來記』『新参阮姓家譜』といった琉球の文献史料は、何れもその記事の事件があった頃にまとめられた同時代史料ではない。後世になってから、様々な手掛かりを基に構成されたものである。これは編集された年代における瓦認識を映し出したものとしては大変興味深く、重要な手掛かりとなるといえよう。しかし、年代の問題、さらに史料の性質からしても、過去の客観的事実を正確に記しているかどうかは疑問が残る。それ自体が根拠となるものではなく、むしろ本当にその通りなのかが検討されなければならない史料だといえるだろう。

ではどうすれば検討できるだろうか。一つは真玉橋村の窯が実在するのか

どうか、発掘調査によって検討しその年代を明らかにすることである。だが今のところ窯跡は発見されていない。開発によって既に隠滅してしまった可能性もあるという。史資料の記述通りかもしれない、しかし違っているかもしれない。どちらともつかず、また裏付けも取れないのが現状である。

③

湧田窯の平窯と中国の窯が共通するという主張には、①の『天工開物』にまつわる議論と同じ問題点が存在する。すなわち平窯という構造を持つ窯は、中国北部だけでなく、中国南部や東南アジアでも広く確認されるのである。単に形態の一致だけでは、系譜を特定することは出来ないと言えるだろう。また中国北部の窯と湧田古窯跡の平窯は年代に大きな差があり、直接結びつけることは出来ない。さらに窯の形状と製品は必ずしも対応しない。窯の系譜と製品の系譜はそれぞれ検討されるべきものである。

今後の研究指針

このように、従来の見解には多くの問題点がある。最大の問題は、中国と琉球それぞれの資料同士を突き合わせた比較研究の成果ではなかった点にある。そもそも中国明代におけるどういった瓦なのか、広い中国のどの地域で、沢山いる中国の人々のうちどういった人々が生産し使用していた瓦の話をしているのかも曖昧である。「明・・・系」という用語は、中国明代の瓦の具体的な内容が認識された上で使われているわけではない。「明・・・系」といった用語のうち特に普及しているのは「明朝系瓦」という用語だが、これを素直に受け取れば、明王朝の支配者層にまつわる瓦という意味合いとなろう。だが中国明代の瓦はほとんど研究されておらず、僅かに報告された資料（図4）は琉球の瓦と相違点が多い。

一方で、中国明代以外の瓦の要素も琉球の瓦には認められる。例えば、「男瓦」「女瓦」といった琉球の瓦用語は、日本列島でこそ古くから認められるものの、中国の文献史料では使用されていない。また南宋代（12～13世紀）の瓦（図6）には、琉球の瓦と類似した紋様を持つ資料が確認されている。もちろんこれら資料とは大きな年代差があることから、直接結びつけることは出来ない。しかしこれほどまでに酷似した資料が存在する以上、その意味する所は慎重に検討されなければならない。

現時点での資料状況をみる限り、系譜を検討する努力を継続する段階にあるのは間違いないが、余りにも資料が少なく、最終結論を出すには早すぎるといえるだろう。今後は中国明・清代の瓦に関する調査を進行すると共に、周辺諸地域の瓦文化を広くかつ実証的に検討する研究姿勢が求められる。

小結 「琉球近世瓦」の提唱

注意して頂きたいのは、この議論は「中国の瓦は琉球の瓦の系譜ではない」と主張するものではないということである。琉球諸島の瓦に中国の瓦が影響した可能性は、両地域の交流の歴史を考えれば十分にあり得ることである。だからこそ多くの研究者が「明・・・瓦」という用語の妥当性を検討してこなかったと言えるだろう。

ただこれまでの議論に問題点があることは、上記の通り明らかである。問題のある議論を経て得られた結論が仮に正解であったとしても、それは研究成果として評価されるべきではないと考える。当てずっぽうは研究ではない。妥当な根拠に基づく厳密な検討過程を含めて、研究成果として評価されるべきだと考えている。

さて「明・・・系」という用語を破棄し、ではこの一群の瓦を何と呼称すべきだろうか。近世期に成立し、現在の赤い瓦の源流となった琉球の瓦は、琉球諸島で発明されたものではないだろう。何れかの地域からの影響を受けつつ、成立したものであることは間違いない。しかしこの点にばかり注目するのは問題である。琉球の瓦は、今日に至るまで様々な変遷を遂げ、琉球諸島の独自性を強く持つようになった。筆者は、こうした定着と独自化に注目すべきだと考える。周辺諸地域から様々な影響を受けつつ、琉球諸島独自のものとして成立し展開した点を重視し、今後は「琉球近世瓦」という用語が使用されるべきではないかと考えている。この視点からの研究には、琉球とは何かを知る手がかりがあると期待している。

※本文は、平成22年度科学研究費補助金（特別研究員奨励費）の交付を受けた調査研究成果の一部である。



図1 本瓦葺き(琉球諸島)



はんぶき
図2 版葺(ヴェトナム)

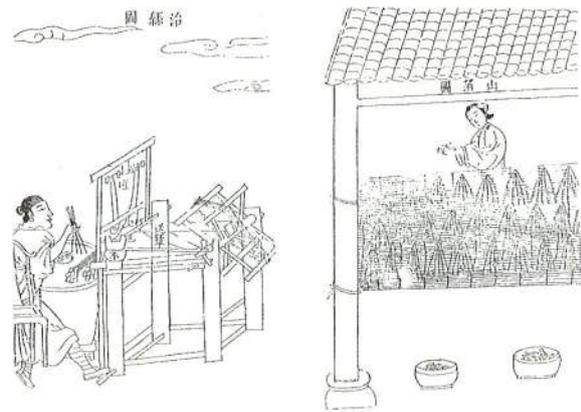


図3 『天工開物』に見る瓦葺き屋根



図4 中国明代の瓦

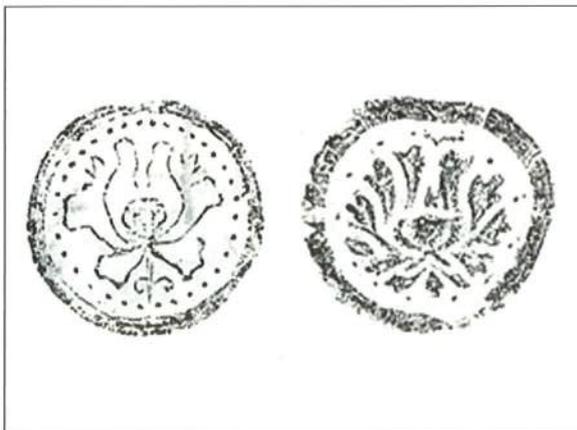


図5 琉球近世瓦

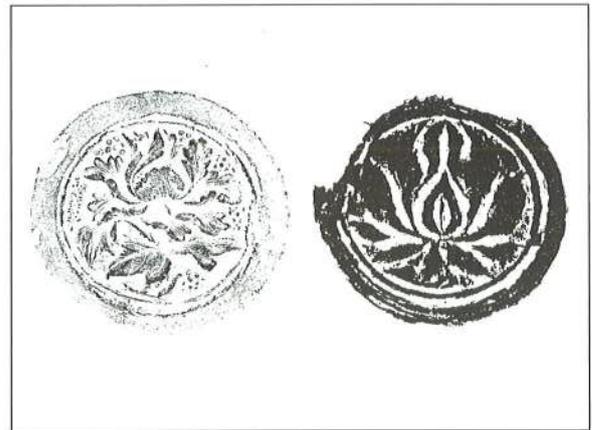


図6 中国宋代の瓦

図1～3、5 石井 龍太 2010年『島瓦の考古学』新典社

図4 石井 龍太 2009年 博士論文『琉球近世物質文化の多角的研究』
より転載